

近世伊豆における林業の展開 (1)

— 林野所有の形成と展開 —

砂 坂 元 幸

Development of Forestry in the Izu District during the Edo Period (1)

Motoyuki SUNASAKA

目 次

I はじめに	1	3. 郷山の管理	17
II 幕府直轄林	4	IV 私的林野保有	19
1. 領主的林野所有の確立	4	1. 私的林野保有の存在形態	20
2. 林野所有の領主的規制	9	2. 私的林野保有の形成と林野の集積	23
III 郷 山	12	V おわりに	29
1. 郷山の意義	12	Summary	30
2. 郷山の形成	13		

I はじめに

わが国林業の発展形態の地域性については、林業地帯形成と関連して、これまで次のような地域类型的把握がなされている。すなわち、西川善介氏の①領主的林業地帯、②農民的林業地帯、③特殊な領主的林業地帯の3類型や、笠井恭悦氏の①民間林業の先進地帯、②藩営林業（明治以降官営ないし国有林業）地帯、③小農民的林業地帯の3類型、そして半田良一氏の①地主林業型構造、②農民林業型構造の2類型である。

また、西川氏は、幕府・諸藩の林野制度を3類型に大別し、その後、その制度類型を育林生産形態の特徴と伐出生産形態の特徴の面から補強し、近世における林業地帯として類型化した¹⁾。鷲尾良司氏はこの3類型の特徴を、次のように分析し、要約している²⁾。

第一類型：原則として領主の資力で木材の伐出生産が行われた天然更新地帯、すなわち領主的林業地帯。飛騨、木曽、秋田、津軽など。

第二類型：林業の全生産過程が非領主的（そういう意味で農民的）資力によって経営された人工造林地帯，すなわち農民林業地帯（「民間林業」地帯）。青梅，西川，尾鷲，吉野，天竜，日田など。

第三類型：領主的林業地帯の典型とはかなり異質なものの一面は農民的林業地帯成立の条件をもっていた特殊な領主的林業地帯。土佐，飩肥。

本研究の対象とする伊豆は，幕府領として領主的林業生産と森林経営の展開した地域で，上記の地域類型からみると，尾張藩，秋田藩，津軽藩等と同様に「領主的林業地帯」として位置づけることができる。これらの藩有林には尾張藩のヒノキ，秋田藩のスギ，津軽藩のヒバといった，すぐれた天然林が分布し，それ故に「木一本，首一つ」というほどの農民に対する厳しい山林利用規制の下で，領主的林業が展開された。これに対して天領であった伊豆にあっては，農民の山林利用に対する規制は比較的緩やかで，ここにおける林業生産は，木材生産においてよりも御用炭生産において，より活発であった。これが伊豆における林業生産の特徴であり，本研究の対象とする第一の理由である。さらに，これらの幕藩直轄林は，明治以降の林野制度の変革を経て，現在の国有林として形成されてきたが，これまでの地域林業の展開構造に関する史的研究は，藩有林から国有林の経路を辿った地域林業論に多くのすぐれた業績があるものの，天領地域における国有林の形成史については研究がなされていない。これが伊豆をとりあげた第二の理由である。

延徳3年（1491）伊豆に侵入した北条早雲は，これを平定し，以後5代（1491～1590）百年にわたる後北条氏支配の基盤を築き上げた。これ以前「遠流の国」の一つに数えられていた伊豆国は，三方を海に囲まれ，中央にはこの地方を南北に両断する形で天城連山が連なって陸路を制しており，政治的にも経済的にも取り残された地方であった。しかし，後北条氏の支配をととして，その存在意義を持ち始めた。

戦国時代に終止符をうち，全国統一を達成し，後の幕藩体制の基礎をつくった織豊時代を経た後，慶長8年（1603）徳川家康は江戸に幕府を開設した。家康は幕府の執務所たる江戸城の石垣に必要な大量の石材を江戸に近い伊豆に求めた³⁾。このことが伊豆と江戸とのつながりの幕開けであった。以来三百年にわたる幕府統治の歴史が始まる。

幕府成立以来天領とされた伊豆国は，元禄10年（1697）の「地方直し」を画期として，以後各地に私領が配されるようになったが，その面積の半ばは幕府直轄地に，残りは大名・旗本の支配するところとなった。幕末期における総石高数8万2千石とされた伊豆国の領域は，君沢・田方・賀茂・那賀の4郡，19組288カ村で構成されていた。

一方，林野については広大な面積の天城山一帯を幕府の主たる直轄林＝御林とし，近世中期以降には，木材需要の増大による木材の商品生産化の進展と折りからの幕府財政の窮乏とから，留木制・林野管理組織の強化等林野制度の編成・強化を行い，「領主の領主」たる幕府によって領主本意の林業生産が展開された（第1図）。

伊豆地方の林業に関する研究業績はあまり多くはない。しかし，そのなかでは，伊豆における林業生産にとって重要な意義をもつ「御用炭生産」を取り上げたものが多い⁴⁾。筆者の研究は，この伊豆を対象に，林業の全生産構造およびその発展構造の史的解明をすることにある。本稿ではとり

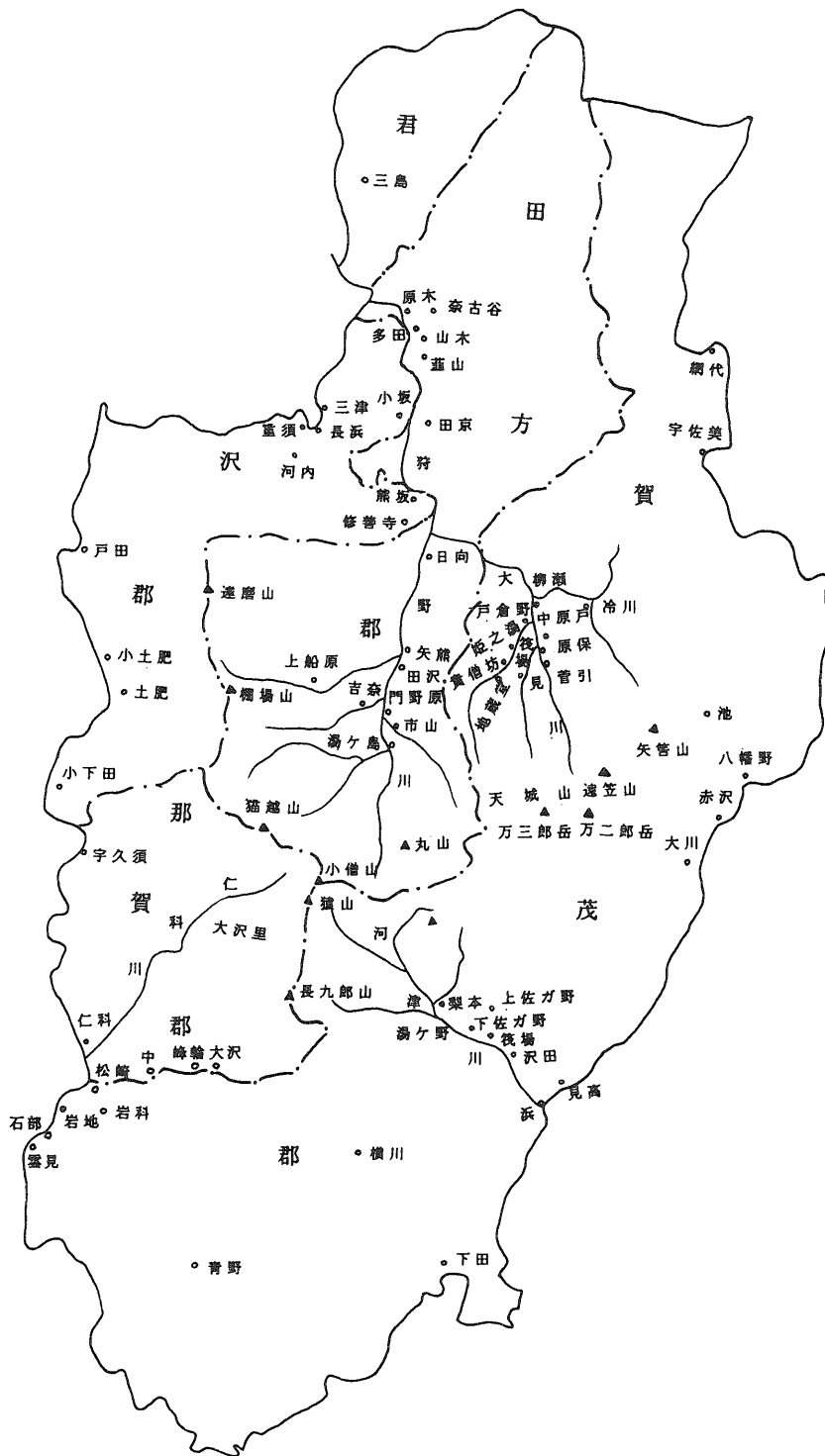


図-1 幕末の伊豆地方図

あえず、近世の伊豆地方における林野所有の形成とその展開について考察してみたい。

ところで周知のとおり、山林利用については、古来より「山川薮沢の利公私之を共にせよ」（養老律令雑令）の原則は維持され、近世に入ってもこの思想は受け継がれていた。近世封建社会における農民は、領主による各種の制約の下でもっぱら貢租のための農業生産に従事することに追われていた。そのため「林野は一般的にみて、直接農業生産に補完的役割を果たすか、あるいは間接に農民の自給生活を維持するための農用林」⁵⁾として共同的に利用されたにすぎなかった。したがって、このような段階における林野の所有観念は頗る微弱なものであった。しかし、近世中期以降、交通・都市の発展に伴う商品生産の進展は、林産物商品の需要増大を促し、これに対応して林野の利用・所有意識も次第に変化していった。

近世伊豆地方における林野は、その管理・経営の主体が幕府にあった御林、大名・旗本にあった御林、村落にあった郷山（村持山）、個人にあった私的林野（百姓持山）などの形態をとっていた。以下、性格の異なる①幕府直轄林、②郷山、③私的林野について林野所有の形成と用益の展開過程を資料に依拠しつつみていくことにしたい。

注

- 1) 鷲尾良司「林業発展形態の地域性に関する研究－飢肥林業発達史論－」, 7頁, (宇都宮大学農学部『学術報告特輯』第34号, 昭和54年)。
- 2) 同書, 55～57頁。
- 3) 『嶽南史』第四巻, 332頁, 慶長19年2月には、「江戸城石壁の築造を分擔せし諸大名等, (略)伊豆國に至りて大石を鑿ち, 船もて江戸に運漕せしむ。船数凡そ三千艘」とある。
- 4) 寺尾宏二「伊豆天城御用炭考」(『歴史地理』第77巻1～3号, 昭和16年)。
日本木炭史編纂委員会編(樋口清之編)『日本木炭史』(昭和35年)。
赤羽 武「封建制下における木炭生産の展開構造」(『林業経済』第22巻11, 12号, 昭和44年)。
浅井潤子「幕府御林山における林業生産－伊豆天城御用炭年季製炭について－」(『史料館研究紀要』第3号, 昭和45年)。
東京営林局編(片山茂樹監修)『伊豆林政史』(昭和39年)。
飯島・河野「伊豆天城御林考(序説)」(『東京教育大学演習林報告』第1号, 昭和44年)。
- 5) 林野庁編『日本林業発達史』上巻, 5頁。

II 幕府直轄林（御林）

1. 領主的林野所有の確立

伊豆地方における御林は主として天城山一帯の山林がほとんどで、その大部分は現在の国有林に相当する部分である。

まず、近世以前の天領天城山（この時代には未だ天城山を狩野山と称した）の様相を資料によっ

てうかがってみることにしよう。

『日本書記』に「応神天皇五年冬十月科伊豆国令造船，長十丈船既成之，試浮于海便輕泛疾行如馳，故名其船曰枯野」とあり，また，『吾妻鑑』の承元2年（1208）閏4月2日に「神宮寺造営材木自伊豆国狩野山之奥出河津海」とあるように，天城山が良材の豊富な蓄積を有し，良質な用材を産していたことが知られる。

さらに降って，後北条時代の弘治2年（1556）及び永禄7年（1564）の2つの資料を見てみよう。

① 北條家朱印状¹⁾

自去戌歳豆州狩野山檜奉行依被仰付

（中略）

一毎年年暮ニ参，年中切候木之員数，其外山之様体，以長純可申上者也，仍状如件

弘治二年

二月廿四日

大河神左衛門尉とのへ

② 北條家山奉行掟朱印状²⁾

改而被仰出條

一如前於狩野山杉檜木出之儀，堅被停止之事

一御用の材木をバ以虎御印判可被仰出事

一取代物人に被頼木を出儀，自脇至于・入耳者，大川父子可被頼事

右，三ヶ條不可致不沙汰候，毎年歳・暮ニ罷越，年中出候板材木御算用可申上者也，仍状如件

永禄七年十月十九日

長純^奉

狩野山奉行

大川神左衛門尉

この弘治2年にはじまる北条氏康の朱印状によって，天城山に檜奉行を置くことになり，後北条氏の天城山支配が確立した。これは経済上の森林資源の掌握を意味しただけでなく，軍事上の意義をも重視したことによるものといわれる³⁾。

このように天城山は近世以前から領主直営林として重要な地位を占めていたのである。

徳川時代になると，その設定年代は詳らかではないが，幕府は天城山を御林に指定し管理した。幕府は数ある御林のなかでも伊豆天城山が近距離に位置するため大きな関心を持っていた。宝歴4年（1754）当時，幕府の林業的「御林」の中での代表的な御林⁴⁾の一つとして天城山が数えられている。これは次の資料から知ることができる。

「御林奉行勤方之儀奉伺候書付」⁵⁾

(前文略)、当時宜敷木品有之、御林之分、大概左之通御座候

一武州大瀧山 一相州丹澤山 一同国中原 一豆州天城山 ○一遠州周知・榛原郡之内 一同
国大久保村 一信州鹿塩・大川原山 一同国野熊山 ○一同国遠山 一同国大島山 一同国丹
澤・野澤山 外 (以下略)

(朱○は当時伐採中の御林)

ではここで、天城山をはじめ伊豆における幕府領御林の分布を見ることにしたい。徳川時代の資料がないため、幕末の様相を示す明治3年(1870)の「御林帳」⁶⁾より摘出してみよう。

伊豆国君沢郡小坂村

- ① 字計岡 但嶮岨
一御林老ヶ所 但平均長二百八十間
横三拾八間貳尺
此反別三町五反七畝拾三步

伊豆国君沢郡河内村

- ② 字堂山 但嶮岨
一御林老ヶ所 但長七百間
横四百三十間
此反別百町三反三畝拾歩

伊豆国田方郡田京村

- ③ 字田中山 但嶮岨岩山
一御林老ヶ所 但平均長三百九拾六間
横貳百八拾間
此反別三拾六町九反六畝歩

豆州田方郡日向村

- ⑥ 字池之山 但嶮岨
一御林老ヶ所 但平均長四百九拾七間
横貳百三間
此反別三拾三町六反三畝老歩

伊豆国賀茂郡網代村

- ⑦ 字網代山 但周田嶮岨
一御林壺ヶ所 但平均長五百貳拾間貳尺
横七百五拾間
此反別百三拾町壺反貳畝貳歩

- 豆州賀茂郡宇佐美村
⑧ 字留田山 但嶮岨
一御林壺ヶ所 但堅四百九間貳尺六寸
横百間
此反別拾三町六反四畝廿三歩

- 字留田山 但嶮岨
⑨ 一御林壺ヶ所 但平均長五百間
横七拾間
此反別拾三町歩

- ⑩ 一御林壺ヶ所 但平均長八拾間
横七拾間
此反別貳町歩

右貳ヶ所御林之儀ハ文化年中知行渡之節、在来御林之内町歩分御渡相成申候

- 伊豆国賀茂郡見高村
長野之内文次郎窪 但平地
⑪ 一松御林壺ヶ所 但平均長凡百廿五間
横凡二拾八間
此反別壺町六反壺畝拾壺歩

- ⑫ 一御林伐木跡壺ヶ所
此反別三町八反九畝廿五歩

右御林之儀ハ延宝之頃起立仕、村持松林ニ相仕立置候処、明和年中御林ニ可差上旨被仰付候ニ付、種々嘆願仕候得共御聞濟無之、明和四子年御林ニ被仰付候、惣反別五町五反壺畝六歩之内三町八反九畝廿五歩文化八未年間宮藏之丞と分口ニ相成候

- 伊豆国賀茂郡下田町
⑬ 字鵜嶋 但嶮岨
一御林壺ヶ所 但長四百六拾間
横六百五拾間
此反別五拾三町六反六畝廿歩

- ⑭ 字赤松 但嶮岨
一御林壺ヶ所 但長百四拾間
横五拾間

此反別貳町三反三畝拾歩

- ⑮ 字劔カ浦 但嶮岨
一御林壺ヶ所 但長百三拾間
横三拾間

此反別壺町三反歩

- ⑯ 字狼煙 但嶮岨
一御林壺ヶ所 但長三百五間
横六拾八間

此反別六町九反壺畝拾歩

右御林の儀（略）寛永年中御奉行今村伝四郎様御代松木植付、御林と相成候其後引続御立木被成下置候由申伝候儀ニ御座候

豆州賀茂郡青野村

- ⑰ 字第一等 但嶮岨
一御林壺ヶ所 但平均長三百間
横貳百五拾間

此反別六拾七町廿七歩

- ⑱ 字牛ヶ鼻 但嶮岨
一御林壺ヶ所 但竪六拾間
横百拾間

此反別六町壺反貳畝歩

伊豆国田方郡湯ヶ嶋組拾貳ヶ村

同国賀茂郡原保組拾三ヶ村

- ⑲ 字天城山
一御林壺ヶ所 但長凡拾三里
横凡 六里

反別不相知候

以上19カ所の幕府領御林の所在と林域を確認できるが、この「御林帳」にはこのほか11カ所の御林が記載されている。これらの小御林は、その所在する村が元禄10年の「地方直し」以降天領から旗本領に代わったことによって、旗本に属する御林となった。

上記の幕府領御林中圧倒的部分を占めるのは、いうまでもなく天城山御林である。その範囲と地理的条件を、享和3年（1803）の「天城山御林帳写」⁷⁾によってみると、

一天城山御林		湯ヶ嶋口
	東西江十三里	河津口
	南北江六里	仁科口
		大見口

反別木数不知

但南方麓より河津浦迄陸路式里夫江戸迄海上三拾三里陸路三拾六里

此 訳

北ノ方湯ヶ嶋口 山上より木立麓迄難所三里余、麓田沢村河岸迄半道程、右河岸駿州沼津浦迄川路八里夫江戸迄海上七拾四里

南ノ方河津口 山上より麓迄嶮難所三里余、麓河津川岸迄式里夫江戸迄四拾五里

西ノ方仁科口 山上より一色村河岸迄難所四里余、夫江戸迄海上六拾三里

東ノ方大見口 山上より宇佐美浦迄難所嶮六里余、夫江戸迄海上三拾里

とあり、その範囲は東西13里・南北6里としている。これは北流する狩野川の本流とその支流大見川、南流する河津川・白田川の上流一帯の山岳林と、中央山脈の小僧山より南に延びる支脈の東西両側の山岳林とを占める4万1千余町歩に及ぶ広大な面積である。

この天城山御林においては、早くから「六木制」と呼ばれる留木制度が設けられていたが、天和3年（1683）には「七木制」となり、貞享2年（1685）には「九木制」へと強化された。マツ・スギ・ヒノキ・ケヤキ・クスノキ・サワラ・カシ・モミ・ツガの9樹種が禁伐木に指定され、留木制度が確立した。さらに、この広範囲の天城山御林の直接管理を目的とする組織として、元禄11年（1698）に御林守が置かれた。御林を湯ヶ嶋口・河津口・仁科口・大見口の4口に区画、御林付村54カ村を設定し、各口に1名ずつの御林守を置いた。その後、御林守は仁科口を除く他の3口に1名ずつ追加し、合計7名に強化した。このような林野制度の設定・強化により、幕府は排他的・強権的的林野所有を確立して、所有権を行使したのである。そこで次に、幕府が林野を囲い込んでいく動きを見ることにしよう。

2. 林野所有の領主的規制

元禄11年に設定された天城山御林付村は、「御林内での雑木・下草の採取など御林より受ける利益は大きく、山付でない村の羨望の的であって、代官所へ陳情したり、裏面工作を行って御林への入会権を得ようとしたが容易に認められ」⁸⁾なかった。そのため、例えば享和6年（1721）の田方郡田沢村と山付村湯ヶ島3カ村（湯ヶ島、市山、門野原）との争論文書⁹⁾にみるように、山付でない村が無断で御林に入り薪を伐出すといったような、しばしば山付村とその他の村との間で紛争

が生じた。山付村数について御林付村設定後の推移を見てみると、「元禄設定時54カ村であったのが、安永8年（1779）には61カ村に、さらに天保5年（1834）には120カ村と当初の約2倍に増加している」¹⁰⁾。したがって、このことは幕府が漸次周辺の林野を御林として囲い込んでいった結果と考えることができるであろう。何故ならば、そのことは先に掲げた天城山以外の小御林が幕府領として組み込まれる経過を見ることによってその一端をうかがい得るからである。

⑪⑫の見高村所在の御林は、延宝期（1673～1680）に村持林として仕立てておいたところ明和期に入り御林として差し出すように言われ、農民側が色々と嘆願したが聞き入れられず、明和4年（1767）強引に御林に組み込まれた林野である。その後文化8年（1811）には、御林5町5反1畝6歩の中から3町8反9畝25歩を分割し、旗本が拝領している。この旗本への知行は、宇佐美所在の⑧⑨⑩の留田山御林についても、同じ文化期に見ることができる。寛永期（1624～1644）には、下田町所在の⑬⑭⑮⑯の4カ所が御林に組み込まれている。

では次の資料から、入会野山が御林に組み込まれる経過の一例を見てみよう。

豆州遠嵩山天城山御林内江組込方之儀伺書¹¹⁾

私御代官所豆州天城山御林統字遠嵩野山之儀凡長三里程、横二里余茂有之候場廣之野山ニ御座候処、右ハ同州賀茂郡大見口并東浦村々御料私領入会秣場統、東海岸通第一之高山ニ而麓付村々ハ孰れも三四里を相隔居、秣刈ハ勿論萱刈ナド立入候ものも無御座候得共、年々春中最寄秣場刈後生立方之為野焼仕候儀ニ付、右火先相移、年毎焼山ニ相成、更ニ立木生立不申、全不用之野山ニ有之候趣及承候間、私御用序及見候処天城山御林江相統罷在、土性ナド同様ニ有之、萱生ナド宜土地ニ而所々木種ナドヲ相見候処、年々焼山ニ相成候儀故、立木生立不申、麓入会秣場境通冬春之内野火除刈切ナドいたし置候ハゞ木種行渡暫時立木出来仕候儀相違有之間敷候得共、数村入会候秣場統之儀ニ付、村持野山ニ而差置候而ハ逆も野火除ナド行届不申候ニ付、天城御林統之儀ニも御座候間、同山御林江組込候様申候、御林守共時々見廻、野火除刈切境ハ焼ナド仕、可成丈立木行渡候様心附候ハゞ、往々天城御林同様立木出来、御国益ニも可相成と奉存、最寄秣場入会村々相糺候処、前書次第ニ而麓村々ハ遠隔ニ在候高山之儀故、秣刈ハ勿論萱刈ナド罷越ものも無御座、全不用野山之儀ニ附如何被仰付候而も故障筋毛頭無御座候段一同申立候、然上ハ手代差出、麓入会村々立会、境筋取極、天城山御林江組込候積申渡候様可仕哉、依之簾絵図相添奉伺候、以上

弘化二巳年八月

江川太郎左衛門印

御勘定所

この遠笠山を御林へ囲い込む経過は次のようであった。

弘化2年（1845）8月、江川代官は上記の伺書を勘定所に提出した。それは、「遠嵩山は天城山脈の東部に位置し、賀茂郡内の御料八幡野村・大川村、私領赤沢村・池村・冷川村・中原戸村・菅引村地続大見口16カ村、東浦3カ村合計19カ村入会の秣場統きの野山である。山麓の村々から遠い

ため山麓の近くを秣場として利用していたに過ぎず、また防火線設定などの保護管理も行き届かない状態である。天城山御林続きの山で、土性も類似しており、ゆくゆくは天城山同様成林し、利益をもたらすことになるので御林へ編入したい。麓入会村々ではこの件について全く異論はない。」、という内容である。

これに対して、幕府よりこの野山の所属が「御料か私領か」の問い合わせがあったようで、弘化3年8月に「全私領地先と申場所ニハ無御座候」¹²⁾と、返答書を提出している。この2ヵ月後の弘化3年10月、幕府は「書面伺之通可被取計候」¹³⁾と、これを許可し、代官はこれを受けて、弘化4年3月に「手代差出、天城山御林守、右附村々為立会御境筋取極、野火除刈切苗木植付方申渡置候」¹⁴⁾と、勘定所に届書を提出して、御林への編入を終わらせた。

さてこの事例の場合、入会村々が「全不用野山」で、御林への編入に対して「故障筋毛頭無御座候」とあるが、これらの資料上では村々からの陳情もあったようではなく、さらに「同山御林江組込候様申渡」という文言から推して、江川代官が御林への編入を強制的に行ったとも考えることができる。

一方、幕府は御林を設定し林地の囲い込みを図り、毛上の囲い込み策として御制木制を設け、森林の管理・保護を強化したが、この九木の禁伐制は地盤の領主的囲い込み策でもあった。この制度は、御林だけでなく、郷山や私的林野にも適用され、郷山にある御制木の伐採には届出を必要とし、次の資料でみるように、修善寺村入の郷山にあった大槻を伐採したときは御林守が調査を行っている。

差上申一札之事¹⁵⁾

一此度修善寺村入大槻之儀寸間見届可申上旨拙者共三人江被仰付候ニ而、右大槻相改候処目通りニ而廻り凡壹丈七尺余長凡六間余有之候処、少も相違無御座候、以上

(明和三年) 戊二月

素山助四郎殿

河内弥二郎殿

山守 庄右衛門

平 六

三郎兵衛

註

1) 『静岡県史料』第一輯（大川文書），394～395頁。

2) 同書（大川文書），395～396頁。

3) 前掲『伊豆林政史』，20頁。

4) 所三男『近世林業史の研究』吉川弘文館，1980，104頁「御林は指定された場所とその性格によって（一）狭義の御林と（二）広義の御林に大別される。（一）は林業経営の対象となりうる条件を具えた森林で（略），売木を含めた自家用材と公共用材との採取・保続を目的とするものであったのに対し，（二）の御林は（一）の林業目的とは縁遠い保護林，今日の保安林（略）に相当するいわば環境保全林であった」。ちなみに，伊豆地方における（二）の御林は

下田町所在の⑬⑭⑮⑯の御林が浪風除御林として存在した。

- 5) 『日本林制史資料』江戸幕府法令集, 162頁。
- 6) 東京営林局蔵「伊豆林政史資料」, No. 537 (江川文書)。
- 7) 同資料, No. 64 (江川文書)。
- 8) 前掲『伊豆林政史』, 99頁。
- 9) 前掲資料, No. 323 (石渡文書)。
- 10) 浅井潤子「幕府御林山における林業生産」, 『史料館紀要』第3号, 1970, 93頁。御林付村数の増加については, 山付村と他の村との紛争の事例をあげた湯ヶ島口で特に顕著で, 3カ村から47カ村への激増を示している。
- 11) 前掲資料, No. 56-2 (江川文書)。
- 12) 同資料, No. 54 (江川文書)。
- 13) 同資料, No. 56-2 (江川文書)。
- 14) 同資料, No. 53 (江川文書)。
- 15) 同資料, No. 207 (江川文書)。

Ⅲ 郷 山 (村持山)

1. 郷山の意義

近世封建社会は石高制＝米納年貢制に立脚した社会であり, ここにおける経済の循環の起点は, 農民からその全生産余剰を収奪する封建領主層の年貢収奪である。石高制は, 米を生産しない畑, 屋敷をも米穀生産量をもって評価し, 1村1カ年分の村内総生産量は石高として表示される。そして村落の規模および個々の農民経営は石高が基準となり, 年貢賦課の単位はすべて石高をもって行われる。また, 封建領主による領主支配の大小や家臣団の給禄も石高をもって評価するのである。近世封建社会の支配, 被支配は米という農産物で一元化されたのであって, 米は近世封建社会の富や社会的地位の「価値尺度」としての機能をもつものといえる。¹⁾

このように近世封建社会が「米遣い経済」といわれるように, 近世農業の生産構造は米作を基幹とする水田稲作農業である。年貢を納めた後の農民が年々農業生産を継続するには, 灌漑用水の確保, 地力の維持(草肥), 生活資材の確保の条件が必要となる。これらの再生産条件を満たすには農民による山林原野の一定の用益を許容することが必要である。山林原野は, 生産手段としては直接肥料として田にすきこむ刈敷, 飼料および敷草として厩にいれ後に肥料とする糞, 灌漑土木用の用材, 木製の農具, 鎌・鋤の柄などの採取に, また, 生活手段としては燃料用材, 屋根ふき用萱, 家屋建築用材, 種実・茸類の食料などの採取に利用され, さらに, 灌漑用水確保のための水源涵養としても重要であった。こうした山林の用益は「むら」を単位とする入会利用, すなわち村持山として村落の用益に委ねられているのが普通であった。伊豆におけるこうした山林は郷山と呼ばれた。

2. 郷山の形成

伊豆地方における村持山は郷林（立木林）、秣・苧敷取場（山）、薪・雑木山、萱野などの名称で資料にあらわれ、その存在形態も次の事例に示すように、入会う村が1村限りのもの、数カ村のものから多いものでは19カ村の村々に及ぶものまでみることができる。

「事例1」

天明四辰年二月

豆州賀茂郡原保村覚書差出帳²⁾

書上帳下書

（略）

一当村郷林ゆき山与申所に内山御座候

一当村秣かり敷取場関野村ゝ入谷一六ヶ村入会ニ取来申候

一右山之内わくさら洞居村ゝ道法七八丁参申候

原 保 村

中原戸村

戸倉野村 五ヶ村入会ニ御座候

宮 上 村

柳 ぜ 村

一右同断かぞふの山居村ゝ道法貳拾丁廿四五丁参

原 保 村

菅 引 村 三ヶ村入会ニ御座候

中原戸村

一秣かり敷取場だんこふり山居村ゝ道法拾丁拾五丁ほど参

右同断

一同断あひのふ山平野山たるの平居村ゝ道法十五丁貳拾丁三十丁参

原 保 村

地藏堂村 三ヶ村入会ニ御座候

戸倉野村

一同断中野山西畑山道法居村ゝ貳拾丁三十丁又者壹里余参

原 保 村

地藏堂村

筏 場 村 六ヶ村入会ニ御座候

責僧坊村

姫之湯村

戸倉野村

一同断右之外御林境を百姓持林境まで天城山裾野通都而麓八ヶ村入会ニ御座候
(略)

豆州賀茂郡原保村

天明四辰年二月

与頭文右衛門⑩

伴右衛門⑩

彦右衛門⑩

又 四 郎⑩

名主次郎右衛門⑩

右次郎右衛門幼年ニ付後見

名主六 郎 治⑩

御地頭所様

御役人衆中様

以上は7カ所の郷山と御林付村8カ村入会山を持つ原保村の例であるが、入会形態も1カ村単独から16カ村と6種の形態をとっている。秣刈敷取場は、牛馬の飼料・敷草、苗代・本田の肥料として用いられる生草の刈り取り場所である。

「事例2」

宝暦十二年午七月御尋ニ付、四ヶ村一同、葦山御役所へ書上ヶ候下書³⁾

秣刈敷山柴薪雑木山書上帳

覚

豆州賀茂郡土肥村

秣刈敷山

一凡反別三拾町余

是ハ当村内山分

右内山分他村を入会之林刈敷山ニ無御座候

柴薪雑木山

一凡反別三拾町余

是ハ当村内山分

右内山分他村を入会之柴薪雑木山無御座候

右此度御尋ニ付書上候所少茂相違無御座候

宝暦十二年午七月

源 八

友右衛門

九 太 夫

仁 兵 衛

江川太郎左エ門様

葦 山 御 役 所

上でみる郷林、柴薪雑木山は自家用の薪炭を採取する燃料林であり、農具用材、家屋普請用材、土木工事用資材を採取する山林でもある。また、「一萱野之儀ハ右四ヶ所之山ニ而取来申候…」（享保20年「下佐ヶ野村差出帳」）にみる萱野は、屋根葺用・炭俵用の資材を採取する山野である。上述のような村中入会・村々入会という形態で存在した入会山の成立については、「制度的には明確な規定を持たないで、旧来の慣行の無干渉容認という形で行われていた」⁴⁾が、「林野の領主権が確立し、御立山が定められ、山奉行以下の藩の林野管理制度が確立すると、入会の制度も単なる事実上の慣行でなく、領主権の認定したものたる性格を備えてくる」⁵⁾。また、村々入会林野については、「新田村の開発の進行、切添新田の増加による耕地・村民の増加」⁶⁾により村内入会林野では自給用の肥草・薪炭材の需要が満たされず、これを確保させるためには領主をして村々相互の共同利用という形態で他村あるいは御林での農用林野の利用権を認めるようになった。

一方、村中入会山が領主権によって認められる時期については、一般的には「寛文・延宝検地の実施段階で永高制から石高制への切り替えを完了させ、寛文・延宝年間（1661～1680年）には小農経営が農業生産の中核をにない、再生産の基礎が小農体制へと完全に移行」⁷⁾し、また、「御林の設定が一応終了する17世紀後半」⁸⁾とされている。

これに対して伊豆の場合をみると、この地方の大半の村落は天城山一帯の山間部落であり、農民の生計維持は山林に依存せざるをえない状態にあった。この点幕府も御制木の伐採禁止以外は御林に対する規制を緩やかにし、火災・盗伐防止などの義務を課す代わりに下草・小柴などの採取を許し、薪炭材等山稼ぎの資材を供給し、農間稼ができるよう便宜を図った。このように幕府は御林を留山に指定することもなく⁹⁾、天城山御林内に村々入会山の存在を容認していたのである。しかしながら、御林の保護育成を図るために、幕府は元禄11年に御林守をおき、御林付村54カ村を設定し御林の管理体制をしき、付村の設定以前は「何附村与申儀不相定、根添村々入会ニ而百姓山稼仕候」¹⁰⁾というように、天城山は山麓の村々の入会山であったが、この付村の設定以後は入会権をもつ村は付村に限定されてしまったのである。

伊豆において村持山が成立する時期は地域によって相違はあるが、早くは16世紀末にみられる。すなわち田方郡奈古谷村と多田・原木・長崎村境争論文書¹¹⁾中で「(前略)、私共村方之儀百六拾貳年以前慶長式丁酉年栗田新七様御検地御竿之節、田畑村境御吟味之上、山野ハ(略)、水落ヲ限内山外者入会ニ村境急度御定被遊、依之往古奈古谷村山与号シ私共地本ニ紛無御座候…」とあり、また、小下田村と宇久須村との入会争論文書¹²⁾の「天和三亥年十一月御代官伊奈兵右エ門様小下田村郷林ニ被成下置候大洞山…」では17世紀後半となっているのがそれである。

では次に、新規に郷山として受け入れたり、あるいは停止されていた入会権利を復活させた例をみよう。

御林相仕立候ニ付下筏場村取置申候一札（筏場区有文書）¹³⁾

一札之事

一当村上佐ヶ野山郷林之儀、拾九年以前亥之年野火入焼失仕候以後又々林ニ仕立申度毎年願罷

有候、我等共御給地ニ相渡他村之様ニ罷成相統埒明不申当年迄延引ニ罷成候所ニ、当年生シ立可被下哉御相談ニ而先規之通り仲間ニ御入被下候、然上ハ向後郷林之儀ニ付如何用之儀御座候共貴様被仰付違背仕間敷候、惣而郷林之儀ニ付不依何事貴様御了簡御差図少茂相背申間敷候、万一相背申候ハゞ仲間御はづし被成、其上此証文ヲ以御上ヘ被仰上如何用之越度ニ罷成候共少茂申分無御座候、尤此方名主方相窺右之通りニ御座候、為後日連判を以一札、仍而如件

筏場村溝口式部様領百姓

正徳三年巳六年

伊五左エ門⑩

(以下15名連署)

名主

安左エ門殿

下筏場村字上佐ヶ野山郷林は、古くから下筏場村民が入会っていたが、山が焼けて以来19年間下筏場村の入会が停止されていた。これが正徳3年(1713)から再び入会を許された例である。

次は新規に郷山として百姓持山を編入した賀茂郡岩地村の事例であるが、年貢・諸役に窮し雑木山を村に売却している。

売渡申譲地之事¹⁴⁾

一 柴山 場所まゝ

右は我等当辰御年貢諸役ニ差詰、代金貳拾五両慥ニ請取売渡申処実証ニ御座候、右之場所ニ付我等は不及申、脇より違乱申者無御座候、為後日証文仍而如件

天保三辰年

本人 文左エ門⑩

証人 吉左エ門⑩

村 中

前書之通相違無御座候ニ付奥印形仕候、以上

名主 八郎左エ門⑩

ところで、近世中期以降とりわけ終期に近づくにしたがって幕藩財政の窮乏化が進行するが、この中で年貢はもとより村を運営するための費用すなわち村入用も、農民に重くのしかかって、村はそれらの負担に窮していた。

木村礎氏の分析によると、賀茂郡筏場村の嘉永4年(1851)の名主給米等12種の村入用は金8両余で、石に換算すると13石余となり、この頃の筏場村納米推定の約半分という巨額であり¹⁵⁾、村入用が農民にとって少なからざる負担であったことが明らかである。このように村の財政が逼迫してくると、財政補助のため郷山を売却せざるを得ない状況も生まれてくる。例えば、文政4年(1821)の「売渡申山之事」¹⁶⁾では、「御年貢御上納」のための重須村郷山3カ所を個人に20年季で売却し

ている。

3. 郷山の管理

郷山の管理は、関係する村民による「法度」等に基づいて、各村の名主・組頭・百姓代の村方三役などによってなされていた。

次に示す資料は、君沢郡三津村の村持野山を清助に譲渡する際に起きた郷山と百姓持山との境界問題を近傍 6 カ村の名主・組頭の仲裁により解決した山林境の取決め書であるが、三津村の名主以下村役人の連署がみえる。

為取替申熟談書之事¹⁷⁾

一此度村内一統衆評之上、村持野山字夕山ヶ洞、清助殿持林続壺ヶ所、同人方江別紙以証文譲渡申処相違無之候、然処右懸合中村持野山続清助殿持林之内字薬師免法六卯右衛門山山田山下倉弥七山右五ヶ所境不分申候ニ付彼是纏合、既ニ出訴ニ茂可及之处、長濱村名主忠左衛門殿重寺村豊蔵殿三郎左衛門殿小海村名主平兵衛殿重須村名主喜藤次殿木負村名主半左衛門殿河内村組頭喜惣七殿、右為御取御立入被下種々御心配被致、林境急度仕分候義者不容易事ニ付扱人取斗ニ而是迄之形其儘ニ境相立、以後故障筋無之ため扱人中之取斗をもって金六拾三両出金致候処、相違無之候、然上者野山ニ入会居候清助殿持林境江行々為安心堀分いたし双方隔意之廉、親類迄聊申分無之候、依之一同連印扱人加判熟談内済申処、相違無之候、如件

安政六年

未四月日

名 主 忠 助^印

組 頭 儀右衛門^印

百姓代 喜 助^印

(他 7 名略)

扱人 長濱村名主忠左衛門^印

(他 6 名略)

次の資料は田方郡山木村 1 カ村限りの郷山の管理規定書である。既存立木の育成、スギ苗等の植栽、無断伐採の罰則、成林後の取扱いなどを村民一同で申し合わせている。

取極申郷山法度定書之事¹⁸⁾

一当村惣百姓申合セ先年有来リ郷山林、永々大破致居野山同様ニ相成、秣・刈敷等一向出不申儀ニ罷有候処、近年郷山林ニ仕立申度由申合候得共、村方時節来リ不申、此度当正月定例廿日初寄合之節惣百姓申合セ村役人衆中江相願申候処、村役人中も一同右之思召ニ早々熟談仕、先年有来リ場所百姓一同見分致、大境等相改是迄有来候松木小木其外薪木山七・八年も見育候ハ、早々山林ニ相成可申、立木無之場所杉等を植附末々大木ニ相成候ハ、用水出方宜敷、行々御田地養方宜敷相成可申奉存候、右ニ付村中不殘熟談之上郷山林企候上者、法度定書

之通り当年より百姓老軒ニ付杉苗五拾本宛年々用意いたし、春中村役人中思召を以村方触当次第罷出植附可申候、左候者而是迄有来リ小木之分何木不限老本たりといふ共伐取候者ハ、男女小供等ニ至迄急度村仕置過錢老人三貫文、其上ニ而七日入寺為致、其五人組より番人附置、日数相済候上ニ而苗木五拾本為植可申段惣百姓一同熟談承知仕候、且又右郷山林末々立木宜敷、薪木等ハ伐配来候節茂一同熟談いたし、村役人中江相願、御勘弁之上伐替、右代金等一同熟談いたし金子遣訳可申候、然所村方大困窮ニ付企候故ハ、金子大金ニ相成候共猥ニ遣申間敷候、神事・祭礼・寺社建立等ニ遣申間敷候、惣百姓貯之心掛、困窮の用意飢難ニ及不申様可仕候、為其定書一札連印如件

寛政十二年申正月

山木村

此右衛門印

幸 八印

(他65名連署)

百姓代

藤左衛門印

組 頭

武 八

同

忠左衛門印

名 主

半左衛門印

惣村中

郷山の保護義務について幕末のものと思われる資料「新林囲立ニ付約定書」¹⁹⁾ からその一例をみると、君沢郡土肥村、田方郡上船原村・吉奈村・門野原村4カ村にわたる山林を郷林に編入した時、各村界に石塚・土塚等を立てて境界を確定し、野火の防止に関する義務、放火人・失火人の措置などを含む共同の郷林保護契約書を作成して各村の義務を申し合わせている。

郷山に対する村民の権利義務については、田方郡原保村の資料「郷山請納為取替証文之事」²⁰⁾ によると、郷山立木の売り払いを行った場合の収入の分配は家割平均とし、郷山の山役も家別に賦課している。また資料「乍恐以書付奉願上候」²¹⁾ をみると、「一御知行所豆州君沢郡小土肥村七百姓惣代奉申上候、当村之儀先年来郷山一件ニ付奉申上候通り、高割郷山軒別割合郷山有之候処、(略)」とあり、郷山の管理と経営に係わる経費は家割と石高割すなわち高割の2種からなっていることがわかる。

註

- 1) 佐藤常雄「村と農民」、大石慎三郎編『日本史(4)近世1』有斐閣、1977、147～148頁。

- 2) 中伊豆町教育委員会所蔵資料。
- 3) 前掲「伊豆林政史資料」, No. 237 (関文書)。
- 4) 古島敏雄『日本農業史』岩波書店, 1976, 276頁。
- 5) 西川善介『林野所有の形成と村の構造』御茶の水書房, 1978, 305頁。
- 6) 前掲『日本農業史』, 277頁。
- 7) 前掲「村と農民」, 143頁。
- 8) 本吉瑠璃夫「近世林業の展開」, 岡光夫他編著『日本経済史』ミネルバ書房, 1991, 72頁。
- 9) 幕府は宝暦12年(1762)九制木のうちスギ, ヒノキが減少し, クスノキは皆無となったために御制木の保護・増殖を目的として御林を留山に指定して, 利用制限を強化しようとした。しかし, 全御林付村54カ村の嘆願により, 植林を始めとする管理保護義務をより一層務めることを条件に従来通りの利用を許可している。前掲資料, No. 295, 296。
- 10) 前掲資料, No. 64 (江川文書)。
- 11) 葦山町史編纂委員会『葦山町史』第五卷(上), 1989, 557頁。
- 12) 前掲資料, No. 228 (浅賀文書)。
- 13) 同資料, No. 206 (筏場区有文書)。
- 14) 横須賀史学研究会編「豆州賀茂郡岩地村齊藤家(大屋)文書」, 1967, 165頁。
- 15) 地方史研究所編『伊豆河津郷上河津』, 1959, 215頁。
- 16) 渋沢敬三編『豆州内浦漁民史料』中巻之貳, 1938, No. 1089。
- 17) 同書, No. 1356。
- 18) 前掲『葦山町史』, 656～659頁。
- 19) 前掲資料, No. 212 (東府屋所蔵文書)。
- 20) 同資料, No. 210 (原保区有文書)。
- 21) 同資料, No. 211 (勝呂文書)。

Ⅳ 私的林野保有

林野の私的所持について, 古島敏雄氏は「中世においては, 年貢負担の基準となる名主ないし, 同様の性格をもつ在家は, 耕地とともに山野をもち, この山にたいして時には直接山年貢を払い, 時には本年貢外の複雑な雑年貢を負担することによって, 売買・譲渡・質入れなども許された財産として所持していたとみることができ」¹⁾, 近世初期においても「各地に村落居住者の上層による山林・原野の私的所持が相当広範に存在することをみることができ」²⁾としている。

また, 近世においては, 名主・土豪層のもとにあった従属農民が封建的小農民として自立化する過程において, 耕地は小農民による個別分散的所持, 林野は小農民による共同占有・入会利用へと変質した。しかし, 経済の発達, 林産物の商品化, 林業の発展を通じて, この入会林野は解体して次第に私的林野が形成されていくことが一般的であった。³⁾

1. 私的林野保有の存在形態

伊豆地方における私的林野の形成期は、資料に乏しいのでなかなか明らかにできないが、慶安4年（1651）君沢郡重須村における「永代相渡シ申山之事」⁴⁾の資料によって、近世初期には私的林野が存在したことを知る。これが近世中期になると、各村の「差出帳」などによって、私的林野の存在が明確に分かるようになる。事例を示そう。

享保11年（1726）賀茂郡岩科村「差出帳」⁵⁾

「当村山里ニ御座候而惣百姓多少によらず自分林面々持申候」

享保17年（1732）那賀郡浜村「差出帳」⁶⁾

「百姓自分持林ハ御座候、山畑御縄目候処二三年も作仕、其処江苗木植置、五六年茂仕立伐取御年貢諸役之足シニ仕候事」

享保20年（1735）賀茂郡下佐ヶ野村「差出帳」⁷⁾

「百姓林之義反別ニ難積御座候、是ハ田畑之くね添ニ少々ツ、御座候、尤此分所持之百姓八九人所持仕候残百姓共少もくね林無御座候」

では、この私的林野の個人別の面積規模はどの程度であったろうか。示しうる1例を示そう。三津村の延享2年（1745）の資料である。

延享貳年丑ノ八月

豆州君沢郡三津村百姓持林秣場書上帳⁸⁾

桐ヶ久保

一林壺ヶ所

来迎寺[㊤]

此反別壺反歩

是者栗沢田雑木林山半途迄御座候而残り半分右之山ニ御座候

入道ヶ洞

一林壺ヶ所

重寺 久左衛門[㊤]

此反別貳反歩

右之内、下畑壺反壺畝拾九歩猪荒ニ罷成、作仕付不罷成候ニ付小松杉之類植申候而年々右下畑御年貢之助ニ仕候

右山之内壺尺^ハ貳尺迄杉拾五本

壺尺五寸^ハ壺尺八寸迄松拾七本

入道ヶ洞

一林壺ヶ所

浄因寺[㊤]

此反別八畝拾歩

是者栗沢田雑木林百^(ママ)性薪ニ仕候

大 片 瀬

一林壺ヶ所

仁右衛門㊤

此反別式反五畝歩

右之内、下畑壺反九畝拾歩古代[㊤]猪荒ニ罷成、作仕付不罷成候ニ付小松杉之類植申候而年々
右下畑御年貢之助ニ仕候

右山之内八寸[㊤]壺尺八寸迄杉拾六本

壺尺[㊤]貳尺迄松拾本

楠ヶ入

一林壺ヶ所

利兵衛㊤

此反別七畝拾五歩

是者栗沢田之雜木林百^(ママ)性薪ニ仕候

梅ヶ入

一林壺ヶ所

九治郎㊤

此反別壺反五畝歩

是者栗沢田之雜木林百^(ママ)性薪ニ仕候

白坂

一林壺ヶ所

又右衛門㊤

此反別壺反五畝歩

是者栗沢田之雜木林百^(ママ)性薪ニ仕候

帶師面

一林壺ヶ所

次郎左衛門㊤

此反別壺反六畝貳拾歩

是者栗沢田之雜木林百^(ママ)性薪ニ仕候

山田

一林壺ヶ所

清右衛門㊤

此反別壺反九畝五歩

右之内、中畑貳畝六歩下畑五歩、古代[㊤]猪荒ニ罷成、作仕付不罷成候故、雜木林仕立、年々
右御年貢相勤申候

大久保

一林壺ヶ所

宇右衛門㊤

此反別壺反壺畝貳拾歩

是者栗沢田之雜木林百^(ママ)性薪ニ仕候

大久保

一林壺ヶ所

仁右衛門㊤

此反別壺反歩

右之内、下畑壺畝拾五歩、古代[㊤]猪荒ニ罷成、作仕付不罷成雜木林仕立申候而右御年貢相勤

申候

ほうろく

一林耆ヶ所

長右衛門⑩

此反別耆反三畝拾歩

右之内、下畑九畝拾歩、古代の猪荒ニ罷成、作仕付不罷成候ニ付小松雜木類仕立年々御年貢

相勤申候

合林拾貳ヶ所

(略)

豆州君沢郡三津村

丑ノ八月

名主 武左衛門⑩

組頭 市郎右衛門⑩

^(ママ)百姓代 又右衛門⑩

三嶋御役所

以上みるように、三津村の場合1人の所持面積は最小7畝、最大は仁右衛門の2カ所3反5畝、平均で1～2反歩であって山林としては小面積である。これは下佐ヶ野村ほかでみられる「田畑くね添ニ少々」、「畑畔添少々」(荃田氏のいわれる「1畝に満たないものから5畝迄の山林所有と呼ぶことのできないような零細な規模」⁹⁾)に比べると大きいようである。また、その所持者数も三津村で本百姓39人中9人、下佐ヶ野村で37人中8～9人と少なく、1カ村で2割程度の限られた層による所持である。

さて上記の事例のなかには、三津村における猪被害による不作の中・下畑から雜木山への切り替え、岩科村における山畑から雜木山への切り替えがみられる。これは「御年貢之助ニ仕候」、「御年貢相勤申候」とあるように、年貢負担を維持していくための農民の対応として、山林への依存度を高めていった結果である。郷山・百姓持山は御制木により伐採を規制されるという不安定なものであったが、多くは薪炭林であり、農民が農間余業を行う稼山でもあった。例えば寛政8年(1796)9月の「賀茂郡横川村差出帳」¹⁰⁾に「一、作之間ニ者男之かせぎ百姓自分之山ニ而炭薪伐、中之瀬へ出し渡世送り申候、女者馬草薪村山ニ而取下田へ出し塩にかひ(替)申候…」とあるように、百姓持山でも薪炭の生産が行われていたことを知ることができる。

燃料(薪炭)の需要増大は、薪炭用の雜木を育成し山稼資材を供給する場として農民の個人持山への関心を次第に強めていったのである。百姓持山は初めのうちは貢租賦課の対象にならなかったが、やがて新たに植林した林は課税の対象になったようである。次に示す資料、宝暦12年(1762)の賀茂郡松崎組8カ村における「百姓持林反別書上帳」から、山役永を上納する「銘々持主有之薪山」の存在をうかがうことができる。

（松崎組）¹¹⁾

一百姓持山 四丁八反二畝拾歩	松 崎 村
役永反ニ永三文	
一百姓持山 八反歩	宮 内 村
役永反ニ永四文	
一百姓持山 五反三畝拾歩	岩 地 村
役永反ニ永四文	
一百姓持山 六反四畝貳拾歩	石 部 村
役永反ニ永四文	
一百姓持山 六反四畝七歩	雲 見 村
役永反ニ永四文	
一百姓持山 九反四畝拾四歩	中 村
役永反ニ永三文五歩	
一百姓持山 壹丁八反六歩	峰 輪 村
役永反ニ永三文	
一百姓持山 壹丁四反四畝三歩	大 沢 村
役永反ニ永三文	

2. 私的林野保有の形成と林野の集積

伊豆地方で林野が私有化されていく主要な経路としては、村持山の個人への分割によるもの、村持山の個人への売却によるものがあげられる。

まず前者の事例として次の資料を示そう。

山木村秣場地割百姓銘々相続の取極（天保八年）¹²⁾

取極一札之事

一山木村地内秣場之内、字山王洞・知覚之入・まむし塚・志だ之池・向ヒ山・中之向ヒ山共都合六ヶ所之儀者、岩石嶮岨之場所ニ而連々秣茂不生立、少々宛入会薪取来候処、今般惣百姓一同相談納得之上、村御役人中互相願、夫々地所割合銘々持山ニいたし、丹誠之上松・杉其外薪林等ニ取立候積、取極鬪取之上地所割合いたし候趣、左之通

字山王洞

東知覚之入洞境
但 西南本立寺山境
北内林境

喜右衛門

定 八
(他10人略)
合拾貳人

字向ヒ山

七右衛門

(略) 久 蔵
(他17人略)
合拾九人

字知覚之入

東志だ之池峰境	文 五 郎
但 西孫兵衛山境	藤左衛門
南金谷山境	(他17人略)
北まむし塚峰境	合拾九人

字中之向ヒ山

源 助
(略) 庄藏後家
(他 7 人略)
合六人

字志だ之池

東山道境	半 七
但 西金谷山知覚之入峰境	義 兵 衛
北香山寺山境	(他 8 人略)
南野山境	合拾人

字たつま石

文之助屋敷地借
(略) 忠 藏
香山寺地借
甚 助
同 断

字まむし塚

東香山寺山境	甚左衛門
但 西知覚之入峰境	善 助
南知覚之入志だ之池出合	(他 4 人略)
北七手境	合六人

半 藏
合三人

(下札)

一字まむし塚善助株之儀、百姓藤藏江相譲、字たつま石文之助地借忠藏株之分、善助株ニ取極候筈一同承知仕候、以上

善助株相続人

天保十四_卯年正月廿日

忠 藏	⑩
藤 藏	⑩

右之通一同納得之上取極候処少_茂相違無御座候、且地借百姓之分者、前書たつま石ニ而三ヶ所割合いたし候積、是又一同申分無之候、然ル上者銘々境筋急度相守、聊_茂猥成義無之様可仕候、右者全百姓相続之ため割合丹誠相仕立候義ニ付、万一家銘相続難成譲引等いたし候節ハ、村役人江相願、必申届之上取計可申、無沙汰ニ譲引いたし候者者、何カ年相立候而も元地主江取戻候積、是又睨と取極置候処相違無御座候、依之惣百姓一同連印一札差出置申処、如件

山木村

百 姓

天保八_酉年正月廿一日

名 主

徳 兵 衛 殿

源 助	⑩
藤左衛門	⑩
(他46名略)	

同見習

百姓代

文五郎殿

喜右衛門

組頭

佐助^⑩

寿平殿

（他24名略）

百姓代

喜右衛門殿

以上は、山木村内秣場のうちの6カ所について山毎に数人から十数人の共同所持という形で分割し、マツ、スギ、雑木林に育て、木材の商品生産化を図ろうとしているものである。また、安政6年（1859）の筏場村資料によれば、「名主他8名のものが八ツ割にして所持している」¹³⁾ になっている。

次に、個人への売却の例を見よう。村の財政的な理由から田方郡筏場、下筏場両村の郷山を船持商人である浜村の重兵衛に年季売りした例である。

年季ニ売渡申山林之事¹⁴⁾

筏場村郷山

但シ車渡場よりなすかさわ迄南者重右衛門堀通り

一山林売ヶ所

境東者火除通り

不残

西者大川通り

北者野沢通り

代金四拾五両也

通用金

右者は迄御年貢未進金相嵩難儀仕候付、両村相談之上貴殿方へ御無心申入、書面之山林年季ニ売渡代金不残儘ニ請取御上納申処相違無御座候、年季之儀者来ル安政四巳より巳迄三拾年ハ前証文売渡し有之、明午より酉迄中拾五年季ニ此度売、依之当文久元酉より前後合四拾九年季ニ相成候処実正ニ御座候、然上者年季中者貴殿方ニ而御所持御支配被成候、尤火除山番等者村中ニ而引請随分念入大切仕生立可申候、若少々ニ而も伐荒し申候類又者野火之難等有之節者、年季御延被成候共売代金ニ利足ヲ加へ御請取被成候共其元御勝手次第ニ御座候、万一此山林ニ付如何様之六ヶ敷儀出来仕候共、村中ニ而引請早々埒明其元江少も御世話御損毛相掛ヶ申間敷候、猶又年季明之節者三生共不残御伐取被成出山無相違御返シ可被成候、為後日年季山三生売渡証文、仍而如件

文久元年酉七月

両筏場村 郷山売主

百姓代 茂 吉

民 藏

太郎右エ門

浜村

重兵衛殿

請 人

重 左 エ 門

茂 右 エ 門

(他19名略)

前書之通り相違無御座候＝付奥印仕候以上

右村

与 頭 半 次 郎

〃 藤 助

〃 由 藏

名主代与頭 兼 藏

名 主 弥左エ門

当山林此度三生目御無心申入候儀、且者年季ニ相成候儀ニ付御辞退有之候得共無理御無心申入候処、格別御出精御買被下忝ケなく候、然上者村中ニ而も万事心配いたし、別而山番火除之儀者念入可申候、右一儀一札書添置候処、如件

上記の事例では、年季期間を延長しての「無理御無心申入」を受けてもらったとして、年季中の「火除山番」など山林の保護管理は各村で引き受けるという条件をつけているのが注目される。

ところで、近世中期以降の交通・都市の発展は商品生産の進展をもたらし、これに伴い林産物商品の需要増大を促した。伊豆においては燃料としての薪炭生産が次第に増大していくが、これは江戸における急激な燃料需要の増大に即応するものであった。このような林産物の商品化の進展は農民の農間稼ぎによる家計補充という意味からも林野に対する依存度を次第に強めていく。一方では林野の商品的価値の増大に伴い、「御年貢御上納不罷成」という理由で林野が売買の対象となり、林野の移動が進行し、さらには経済力のある村落上層農や商人による林野の私的集積という結果をもたらすことになるのである。

そこで次に、林野集積の二つの事例を見ることにしよう。

(1) 上層農による土地集積

田方郡熊坂村は「元禄地方直し」で旗本5人と一譜代小藩に分給された石高数507石余の村であり、竹村家は村内6人の名主の中でも1、2を争う名主役を勤め、村内唯一の酒造業も営む豪農であった。この竹村家の土地集積については、高橋敏氏の分析¹⁵⁾に依拠して林野集積の状況を見てみたい。期間は明和9年(1772)～天明4年(1784)までの13年間である。

田・畑・屋敷・山林の質取りによる集積の状況は表-1の通りで、土地集積は、件数で82件、金額で590両余、対象の実人数は48人にも及び、その範囲は村内はもとより周辺9カ村にも及んでいる。その土地の内訳をみると(表-2)、田畑に470両余、山林には全資金額の20%の118両余が費やされ、21カ所もの山林を集積している。これらの山林の面積は資料上に記載がないため、数値的

表－1 竹村家の土地集積

村 名	筆 数	買取金額	買取実人数
熊 坂	30	203両 3 分 朱	15
堀 切	30	86 3 2	15
大 仁	9	196 3	8
大 沢	4	27	3
小 室	2	15 2	2
益 山	3	8 2	1
瓜 生 野	1	5 2	1
立 野	1	11 2	1
重 須	1	25	1
三 津	1	10	1
合 計	82	590	48

注) 1. 修善寺町誌資料No. 1, 121頁より転載。

2. 出所は竹村家「田畑山林代金帳」。

表－2 土 地 明 細

地 目	金 額	筆 数
田 畑	470両 3 分	62
屋 敷	1	1
山 林	118 1	19(21ヶ所)

注) 表－1に同じ。

には把握できないが、その箇所数からみてもかなりの集積がうかがえる。しかも、「これら質地のうち後年請返しとなったものは10件で、金額にして僅か25両にすぎず、大部分が竹村家のものになっている」という。したがって、「田畑はほとんど質地小作として作徳米の収納をねらったもの」で、「こ

の大金をもって土地の集積を可能にした背景には、相当の地主であることはもとより、酒造業を営んでいたところに、よるところが大である」というが、そのとおりであろう。

(2) 船持商人による山林集積¹⁶⁾

享保20年(1735)の「賀茂郡下佐ヶ野村差出帳」に「男之稼ニ耕作之間仕候へ天城山ノ雑木江戸薪伐附出シ稼ニ仕来……商人方へ日々ニ伐売渡世仕来…」とあって、農閑期には農民による薪生産が行われていたことがわかる。こうした山方の山稼生産による薪炭等の林産物は、浦方の集荷商人の手に掌握されていた。これらの商人は「江戸への回船をもつ船持仲買であり、幕府に対して御運上分一を納入する任務を担う反面、集荷の特権を公認されて、自己の商業活動を有利に回転させる」¹⁷⁾ ことができた。したがって、「各村の名主あるいは上層農が商品流通の担い手として、船持商人化し、やがて田畑山林等も彼等の手に集中されていく結果となる」のである。

そこでまず、次の表－3によって明治初年の下佐ヶ野村における山林原野の状況をみると、村持と秣場・草野等の比率、個人持と山・山林等の比率がほぼ同じであり、山林、林等はほとんどが個人持である。

次に、これら林野の所有形態を表－4でみると、享保20年の差出帳では百姓持山を「百姓家数49軒のうち八、九人所持」していたのが明治初年には42名となっている。これを村内と村外に分けると、所有者数では村内が34名で、80.9%を占めているが、

表－3 下佐カ野村山林原野状況表

山林原野総面積		25町 8 反 8 畝 17 歩	100.0%
所有者別	村 持	3 3 6 26	13.0
	個 人 持	22 5 1 21	87.0
地目別	秣 野 ・ 野 地 草 野 ・ 墓 地	3 5 3 25	13.7
	山 ・ 山林 ・ 林	22 3 4 22	86.3

注) 1. 地方史研究所「伊豆河津郷 上河津」221頁より転載。

2. 出所は「明治初年下佐カ野村山林原野歩詰帳」。

表－4 下佐カ野村明治初年林野所有状況表

	0.5反以下	0.5～1	1～5	5～1町	1町以上	計
人数	12	7	11	7	5	42人
%	28.6	16.7	26.2	16.6	11.9	100.0
村 内	12	7	9	5	1	34人
						80.9
村 外	0	0	2	2	4	8人
						19.1
面 積	2.4.13	5.5.02	3.6.7.04	5.9.4.05	12.1.4.17	町 反 畝 歩 22.5.1.21

注) 表－3に同じ。

村外所有者の所有総面積は「10町1反4畝4歩」で、山林・林総面積22町3反4畝22歩のうち、ほぼ半数に近い山林を占めている。また、村外所有者は「すべて4反以上」であり、特に1町歩以上の所有者5名のうち4名までもが村外者で占めている。さらに、「8名のうち5名までが浜村のもので2町以上黒田重兵衛¹⁸⁾、近藤権右衛門、1町以上森田万吉といった家で回船との関係をもち、浜村以外でも1町以上の沢田村正木家は船持である」という。したがって、このことは前述の船持商人による林野集積を裏付けていることになる。

注

- 1) 古島敏雄『近世経済史の基礎過程』岩波書店、1978、151頁。
- 2) 同書、170頁。
- 3) 笠井恭悦『林野制度の発展と山村経済』御茶の水書房、1978、133頁。
- 4) 前掲『豆州内浦漁民史料』上巻、No.175。
- 5) 渡辺一郎編『幕臣岩瀬氏関係史料』、1958、No.199。
- 6) 前掲「伊豆林政史資料」、No.48。
- 7) 同資料、No.38。
- 8) 前掲『豆州内浦漁民史料』上巻、No.679。
- 9) 前掲『伊豆河津郷 上河津』、222頁。
- 10) 地方史研究所編『伊豆 下田』、1961、225頁。
- 11) 前掲『幕臣岩瀬氏関係史料』、9頁。
- 12) 前掲資料、No.258（石渡文書）
- 13) 前掲『韭山町史』、659～665頁。
- 14) 前掲『伊豆河津郷 上河津』、225頁。
- 15) 同書、285～286頁。

- 16) 修善寺町教育委員会編『修善寺町誌資料』No. 1, 118～120頁, 「明和八年卯ノ十二月吉祥日 田畑山林代金帳」による分析。
- 17) 前掲『伊豆河津郷 上河津』, 221頁, 荃田佳寿子氏の分析に依拠している。
- 18) 前掲『幕臣岩瀬氏関係史料』, 8頁。
- 19) ちなみに, 黒田重兵衛は先にみた両筏場村郷山の年季売りの事例中の買い主「浜村の重兵衛」であり, 黒田家は回船を中心に雑貨商を営み名主としての位置が明治期における山林地主としての地位を築き, 現在では670 ha の山林を所有している。

V おわりに

徳川幕府の天領であった伊豆国は軍事上のみならず, 江戸・大阪間を結ぶ海上交通上の要地でもあり, 何よりも消費都市江戸に最も近いという条件を持ち, 御用材や御用薪炭の供給地として重要な地位を占めていた。

伊豆地方における主たる林野は, 天城山一帯である。天城山を始めとして, 天領の林野は, 管理・経営の主体により, 幕府・旗本・大名の御林, 村落入会の郷山, 百姓個人の私的林野に分かれていた。本稿では, これらの林野のうち幕府直轄林, 郷山, 私的林野の3つの形態について考察したが, 以下要約してまとめたい。

天城山を中心とする広大な面積を擁する幕府直轄林は, 近世以前から寺院造営材や船材を採材していたところで, 良材があることは知られており, 経済上の森林資源のみならず, 軍事上の要害としても意図されていた。

徳川時代になるとこの森林は御林に編入された。この天城山御林には, 早くから「六木制」と呼ばれる留木制度がしかれていたが, 貞享2年(1685)には「九木制」へと強化し, 留木制度を確立させた。この制度は, 郷山や私的林野にも適用され, 単に毛上の囲込み策として設けられただけでなく, 「地盤の領主的囲込み」をも意図されたものであった。さらに元禄11年(1698)には, 直接的な御林の管理保護のために御林を4口に区画, 御林付村54カ村を設定し, 各口に1名ずつの御林守を置き, 領主的林野所有の確立・強化を図った。また, 御林付村を増加することによって天城山周辺の林野を囲い込み, 御林の拡大も図った。

幕府は郷山と私的林野に対しても禁伐木を指定したが, 農業再生産や生活維持の上で必要な下草や薪炭・用具材等の採取については規制せず, 御林内にも付村に限定はしたものの入会山の存在を容認し, 薪炭等の山稼ぎができるよう便宜を図ったほどであった。この御林内での入会については, 元禄11年に幕府が御林の管理保護組織を置いた時点で, 入会権がこれまでの単なる慣行から領主によって御林付村に限定して認定されるという段階を迎えた。

一方, 「むら」を単位として入会利用する山林として村持山があり, そこでの用益は村落の用益に委ねられていたが, 伊豆におけるこうした山林は郷山と呼ばれた。郷山への入会形態は, 1村限りのものから19ヶ村の村々に及ぶものまで多様な形態がみられるが, その成立期は慶長2年(1597)

検地の田方郡奈古谷村の例が早く、賀茂郡大沢村では延宝6年(1678)検地で反別、箇所数の記載がみられるようになる¹⁾。

郷山の管理運営は村民一同の合意をもって名主、組頭、百姓代の村役人などの下に行われている。これに係わる経費については、山役は家別に賦課し、支出も家割平均で負担している例も見られるが、一般には家割と高割の2種を採用しているのが普通であった。

私的林野の存在は近世初期の段階で認められるが、各村の「差出帳」などで明確化するのには中期に至ってからである。その所持面積は極めて小規模で、比較的規模の大きい三津村の例でも1人当たり1～2反歩程度であり、所持者数も村を構成する百姓家数の2割程度と、ごく限られた層による所持状態であった。

近世中期以降の木材の商品生産化の進展は、薪炭用の雑木を育成し農間稼ぎの資材を供給する場として、農民の山林に対する関心を次第に高めていった。その結果、中・下畑や山畑から雑木林への切り替え及び植林による林地化、郷山の個人への分割が進行し、また一方では、林野の商品的価値の増大にともない林野が売買の対象となり、郷山の個人への売却による林野の私有化と個人から村内外の個人への売却など、「年季売り」・「永代売り」形式での林野の移動も頻繁に行われるようになる。こうして、経済力のある者による林野の私的集積という結果をもたらすことになった。伊豆では山方の名主を中心とする上層農と浦方の江戸への回船を担う集荷商人による林野の集積形態がその典型であった。

「国中不残御林」、「飛州之儀三郡＝而…田畑・屋敷之外者悉く御林山＝而」と領主による強力な規制下にあった御林山・飛驒山とは異なり、比較的緩やかな規制の下で林野所有の展開がみられたこの地域で、領主層と農民層が如何なる林野利用の展開を見せるか、この点について考察することはこれからの課題である。

注

- 1) 前掲『幕臣岩瀬氏関係史料』, 10頁。

Summary

Izu district belonged to the Shogunate in the Tokugawa Era. This district was the nearest to Edo which was the major market. It held an important position as a place which supplied timber, firewood and charcoal to the Shogunate.

The main forest land in the Izu district covered Mt. Amagi. Mt. Amagi and the other forests of the Shogunate were divided into three types according to the management, namely Ohayashi, Goyama and private forest.

This paper describes the formation and development process of forest ownership in the Edo period and the conclusions are follows:

I. Ohayashi (forest under the direct control of the Shogunate)

When the Tokugawa Era began, Mt. Amagi was taken into the Ohayashi category. In this category the system of prohibiting the cutting of certain timber, called 'Shichibokusei', was laid down, and thereafter in 1685 two more kinds of tree were added to make nine prohibited species. This system was applied in the Goyama category and private forests, and the aim was not only the enclosure of stands but also of land. In 1698, the Shogunate divided the Ohayashi into four watersheds (Ohomi, Kawazu, Kano, Nishina) and allowed fifty-four villages, the so-called 'Ohayashitsukimura', to use minor forest products from the Ohayashi. Moreover, the Shogunate arranged 'Ohayashimori' in order to manage and protect the Ohayashi directly, because the Shogunate planned to establish and strengthen feudal forest ownership. In the meantime, the Shogunate included forest land round Mt. Amagi into the Ohayashi by increasing the number of villages under the Ohayashi system and planned the enlargement of the Ohayashi. We find that the number of villages under the Ohayashi system increased from fifty-four in 1698 to one hundred twenty in 1834.

Though the system of prohibiting the cutting of certain timber was applied in Goyama and private forests too, the Shogunate did not control the farmers' cutting of grass and wood as firewood and charcoal, which the farmers needed for agricultural production and everyday life. Also the Shogunate admitted that only villages under the Ohayashi had common forest land in the Ohayashi and gave the villages permission to make firewood, charcoal and etc., there.

II. Goyama (community forest)

Farmers needed forest land to continue agricultural production. This forest land was used a single common unit by the village, therefore a usufruct was treated as belonging to the village. Such forest land was called 'Goyama' in the Izu district. The number of villages using Goyama in cooperation varied from only one to nineteen in this district. Though the period when Goyama was formed in the Izu district is different according to the region, we know that it can be found in the land register of Nakoya village, Tagata district, as early as in 1597. We also find that each area of Goyama was recorded in the land register of Ohsawa village, Kamo district, in 1678.

The officials of each village (Nanushi, Kumigashira, Hyakushodai) managed Goyama with the mutual consent of the villagers. The expenses of managing Goyama were generally paid by every family (Iewari) or according to the amount of taxes (Takawari).

III. Private forest (Hyakushomochiyama)

We know that private forest existed early in the Edo Era and we find private forest in 'Mura-Sashidashicho' (report on the situation of village), in the middle of the Edo Era. The

area of forest which a farmer had was very small. The area was only 1~2 tan per capita even in case of Mito village which we consider as having comparatively large scale ownership. Furthermore, private forest was owned by farmers in a limited class, because the number of owners was about 20% of the families constituting a village.

When timber products began to enter the market after the middle of the Edo Era, farmers began to show an active interest in the forest as a place which produced marketable products such as firewood and charcoal. As the result, fields were afforested, Goyama divided, and in the meantime forest land became a marketable commodity. Thus, forest land was accumulated privately by men of resources. There were two typical examples in the Izu district. The one was by high-class farmers (village headmen and so on) and the other was by merchants collecting cargo and shipping to Edo.